



# 白門板橋

2011. 3. 15 VOL.35

編集  
発行

中央大学学員会 東京板橋区支部

〒173-0035 東京都板橋区大谷口1-39-2 TEL03-3956-9054



新春メッセージ

「新しい年を迎えて」

支部長 石塚 輝雄

新年明けましておめでとうございます。昨年中は会員の皆様には支部運営に格別のご配慮ご支援を頂き、本年も昨年同様よろしくご支援ご協力をお願い致します。

昨年十一月十三日、中央大学創立一二五周年記念式典が秋晴れのもと、多摩校舎で盛大に挙行され私も参加して参りました。中央大学の関係者の力が結集されてあのような意義ある立派な式典になったものと思ひ感激もひとしおでした。

昨年暮れから毎日のように、この春卒業予定の大学生の就職が大変厳しいことが報じられています。不況が学生の就職への門を狭くしているのだと思います。一方学生数の増加も報じられています。今日の大学には多くのことが求められていますが、「就職力」についてはどの大学にも共通する課題ではないかと思ひます。就職によい結果ができればその大学の評価は一般的によい大学であるとの評価を受けるでしょう。私の知るある大学の卒業生は、大学在学中に公務員養成の専門学校に通学して、公務員試験に合格し現在採用され活躍しております。

永井和之総長は、年頭挨拶で「日本の企業が国際化しているなかで、いま何が起きているのか、この就職難の時代に外国人留学生の採用枠を拡大している現状がある。これは何を意味するのか。日本人の学生が国際的に活躍できる人材になっていない、日本の大学に対する猛烈な批判である。このことを私たちはしっかりと受けとめて（略）世界のどんな企業にも本学からの卒業生がほしいといわせる教育をしなければならぬ」と言っております。創立一二五周年にあたり考えさせられる問題であります。

# 支部のニュース

## ■支部の旅行 猿ヶ京温泉に秋を訪ねる

二二年度秋の旅行は十一月二七日・二八日の両日、天候に恵まれた中、晩秋の上州・猿ヶ京温泉を訪れました。



▲飛び入りの余興

静かな里山に囲まれた旅館で、ゆつくりと温泉につかり日頃の疲れをいやし、美味しい夕食に舌鼓を打ち、楽しくお酒をいただきながら懇親を深めました。

(三宅記)

「紀行文を六ページに掲載」

## ■忘年会和やかに開催

平成二二年度の忘年会は、昨年十二月二日(木)午後六時から蓮根の「よし邑」を会場に、志村・坂下ブロックの担当で開催された。

担当者の熱心な勧誘が功を奏し平日にもかかわらず、この日は四五名の参加者で埋め尽くされ、大森ブロック長の挨拶に始まり、石塚支部長から一年を締めくくる挨拶をいただいた後、会場を提供いただいた「よし邑」川口正社長(副支部長)から、ご愛顧のお礼の挨拶があつて、小日向顧問の乾杯の音頭で開宴となった。



会場の「よし邑」は、板橋区内

でも数少ない高級割烹で、その料理はテレビで紹介される程の逸品ぞろい。加えてガラス戸越しに、きれいに手入れの行き届いた庭に、控え目なイルミネーションが淡く輝いて、いやしの空間を演出している。

和風あふれる桧(ひのき)造りの香りが漂う会場で、美味しい懐石料理に舌鼓を打ちながら、内外とも大きく揺れた平成二二年が去り往くのを静かに、そして和やかに見送った忘年会であった。

(池田記)

## ■肅々と新年を祝う

支部恒例の「新春の集い」が、一月二二日(土)午後六時から区立文化会館で開催された。

当日は、五六名の会員が集い、石塚支部長の挨拶の後、久々に記念の集合写真を撮り、佐藤(道)副支部長の発声で乾杯!

抽選で区分されたテーブルにセルフサービスで取り寄せた好みの

料理を運んで直ちに会食・懇談に入る。料理は、いつものようにサニイチさんの手によるバイキング形式の和・洋を取り混ぜた豪華なメニュー。飲みながら、食べながら・・・そして歓談しながらの新年会は時間の経つのが早い。

初参加の会員紹介を経てカラオケを楽しむと、校歌・応援歌に惜別の歌を全員で斉唱して、関上監事の音頭で中締めとなり散会した。

(池田記)



# 母校のニュース

## 検事総長に

### 笠間治雄氏が就任

大阪地検特捜部による郵便不正事件など一連の不祥事で、前検事総長が引責辞任したことに  
より、昨年12月27日付で法務省は、左記のとおり、人事異動を発令した。

記

#### ▽検事総長

笠間治雄

(東京高検検事長)

昭45法卒

#### ▽東京高検検事長

小貫芳信

(名古屋高検検事長)

昭48院法卒

\* \*

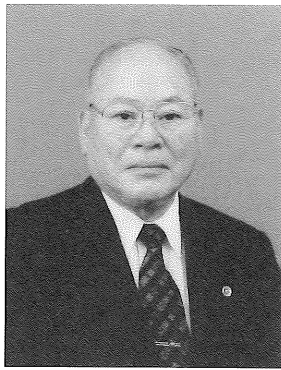
新検事総長に就任した笠間氏は、戦後、私学出身では初の人事で本学としても大変名譽なニュースであった。

(平山記)

## 阿部三郎元理事長逝去

昨年9月8日、中大顧問で元理事長の阿部三郎氏が、心不全で逝去された。享年八十四歳。

阿部氏は、昭和25年に本学法学部を卒業、26年司法試験合格。東京弁護士会会長、日本弁護士連合会会長を務めた後、平成8年からはオウム真理教破産管財人に就任し、地下鉄サリン事件などの被害者救済に奔走した。



中大では、選任評議員、理事を歴任後、平成11年に理事長就任。在任中の13年から始まった中大創立二五周年記念事業募金の推進に尽力され、退任後顧問に就任。

(平山記)

## 箱根駅伝六位に終わる

新春恒例の大学駅伝は、事前の予想どおり三強（早稲田・東洋・駒沢）が、スピード駅伝で圧倒的な強さを発揮、中大は常にはるか後方を争う展開となりました。

それでも各選手は、設定どおりの走りをして、昨年より五分程早いタイムでゴール。総合六位となり、二十七年連続シード権を獲得しました。

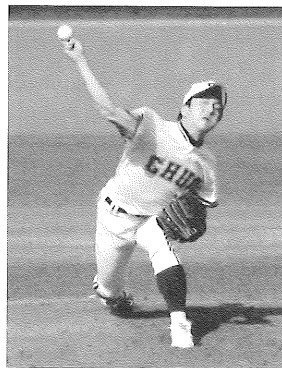
総合優勝した早大、二位東洋大ともに大会新記録を出しているように、全体のレベルは驚異的にアップしたレースでした。

## 島袋洋奨君が初練習

今春本学に入学が内定している島袋洋奨君（昨年甲子園で春夏連覇を果たした沖繩・興南高校投手）が、二月二日に中大グランドで練習に初参加しました。練習を見た高橋監督は、「春のリーグ戦で開幕投手の一人にな

る」と期待を寄せていました。

昨年の秋季リーグ戦は、絶対的なエース沢村拓一君（巨人入団）を擁しながら、打線がふるわず三位に終わりました。



(写真提供・中大スポーツ新聞部)

今年、島袋君と新エースと評判の鍵谷陽平君（北海高・新三年）の二本柱で優勝をめざし、頑張るものと期待されます。

## 入学志願者四千人増

今年の入学志願者は、前年比四千人強増加し、八万六千人余（後期試験は前期並みと推定）となりました。この人数は、一昨年に記録した八万五千人を上回る記録になりそうです。

(栗原記)

# 告 知 板

## ■観桜会の日程等

支部恒例の観桜会の日程が、左記のとおり決定しました。奮ってご参加下さい。

記

日時 四月二日(土) 正午

集合 東上線上板橋駅南口

午前十一時 厳守

会場 茂呂山公園

(雨天の場合は、桜川地域センター)

会費 四千元

担当 大山・大谷口ブロック

(垣内、大野、徳永、露木、佐藤)

申込 別紙で三月二七日迄

## ■支部総会の日程

支部定時総会の日程が、次のとおり決定しましたので、お知らせ致します。

記

日時 六月十八日(土) 六時

会場 板橋区立文化会館

4F 大会議室

(事務局)

## ■同好会開催日程

### ○ゴルフ同好会

日時 四月十二日(火)

場所 グレンオークス

カントリークラブ

(千葉県香取市)

申込 内田繁夫まで

電話(三九六九) 一四六三

### ○囲碁同好会

(第十三回・白門練馬支部との親

善交流大会)

日時 五月十一日(水)

十二日(木) (二泊一日)

場所 秩父・小鹿野町

越後屋旅館

申込 布施二郎まで

電話・FAX

(三九六七) 一六九三

## ○カラオケ同好会

日時 五月六日(金)

(午後五時三〇分より)

場所 レストラン・サンイチ

申込 佐藤 義まで

電話・FAX

(三九三五) 五二四五

## ○パソコン同好会

日時 五月十一日(水)

(午後六時より)

場所 ハイライフプラザ

いたばし

申込 吉岡聯太郎まで

電話(三九三六) 八三一五

## ■記念事業募金状況

母校中大創立一二五周年記念事業募金状況は、二月二日現在で次のとおりです。

記

募金総額 金六三万七千五百

募集人員 七十四名

都区内支部十七支部の内七位の成績で人数で五番目。

募金の受付は今年の九月末日

まで行われています。ご協力よろ

しくお願いします。

(募金推進員・池田亘利)

## ■TOPICS ①

久々に本学卒業生が

「直木賞」を受賞

第一四四回・直木賞に本学卒業(文・平二年)の木内昇さんが受賞しました。受賞作は、時代小説『漂砂のうたう』でした。また木内さんは、〇九年度に、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞も受賞しています。

久々の朗報にまずはめでたし。

### (註)直木賞

直木三十五の大衆文学における先駆的功績を記念して、一九五三年菊池寛が創設した賞。

春秋二期、新進・中堅の作家

に授与。四五年第二次大戦のため中断し、戦後の四九年復活。

本学の受賞者とその作品名。

第50回(一九六三年)

和田芳恵『塵の中』

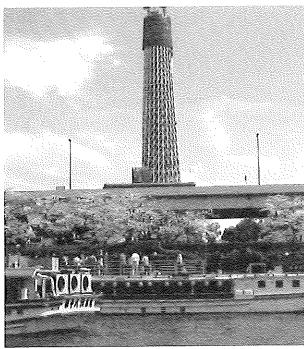
第83回(一九八〇年)

志茂田景樹『黄色い牙』

第96回(一九八六年)

逢坂剛『カデイスの赤い星』

(栗原記)



■白門レガッタで銅メダル

母校の一二五周年記念事業の一環として、去る十一月二十一日、埼玉県戸田ボート場で大学学友会主催の白門レガッタが開催された。当支部・大野事務局長の呼びかけで、元気な若手が集まり速成の「板橋白門会」チームを編成。

ボート部OBの特訓を受けてエントリー。一般男子の部七チームが出場した中で、堂々三位に入賞、銅メダルを獲得した。



▲健闘を称え合う4選手

出場選手は次のとおりでした。徳永勝彦、荒井賢太郎、松島道昌、小宮仁の四氏。

因みに優勝したのは、「おじさんスターズ」チーム、準優勝は「藤井てるあき」チームでした。

(徳永記)

■新入会員のご紹介

▽

▽

▽

▽

ご入会おめでとうございます。いろいろな同好会がありますので、ご趣味に合う会をお選びになり、ご参加下さい。

\* \*

■訃報

▼村上 和六（30法）

（平成22年11月1日逝去）

謹んでお悔やみ申し上げます。

(事務局)

【歳時記】年賀状に想うこと

平山惟美

毎年正月になると想うことだが、二百通近い年賀状を受け取ると、その半数はパソコンによる宛名印刷で、表書きだけを見る限り、誰からの賀状か分からない。

機械処理による無機質な所産で差出人の顔が全く見えて来ない。

人の手で百通を超える宛名書きは苦痛であり、それが齢をとると過酷な作業になる。悪筆を伏せて能率よく宛名を書くには、機械依存は止むを得ないが、商業ベースのDMだけに限定してもらいたいものだ。見覚えのある直筆の文字を見ただけで、元気にしているかどうかも見当がついて嬉しいもの。本文の印刷は仕方がないとして、定型の印刷見本から選択して印刷するのは味気ない。自分の文言で抱負なり決意なりを添え書きして語りかけてはどうだろう。絵心のある木版画などを刻した賀状は希少価値も大きい。いま流行の絵手紙と同じように、差出人の人の柄や温もりが伝わって嬉しいものである。

■TOPICS ■.....②

谷 啓 急逝



●昨年九月十一日（土）に、俳優で元クレージーキャッツの谷 啓（経中退）さんが、脳挫傷で急逝した。

テレビ番組などでコメディアンとして活躍「ガチョーン！」などのギャグが流行語になった。トロンボーン奏者としても日本有数の存在だった。

芸名はダニー・ケイに由来。

●晩年は、俳優として「釣りバカ日誌」シリーズなどでも活躍した有能なタレントで、その急逝が惜しまれる。

死因となった脳挫傷とは、自宅の階段から滑落して後頭部を挫創したもので、高齢者への警鐘ともなった。

(平山)

秋の旅日記

晩秋の上州を歩く

三宅正代

■にわかガイドに拍手

恒例の秋の旅、今年には群馬県猿ヶ京温泉。十一月二十七日(土)、定刻八時過ぎに佐藤副支部長お見送りのもとグリーンホールを出発。間もなく幹事長及び旅行幹事の挨拶。終了後「乾杯！」の声が上がり車内はいつきに盛り上がった。お酒をいただくみんなの顔は幸せそのもの、笑顔がはじけていた。今回の旅行は参加者が十七名と少なく、経費の都合上バスガイドの添乗もなかった。が、その分群馬県出身の松島さんが頑張ってくれました。訪れる地域について、ガイドさん以上のわかりやすく詳しい説明に、車内の皆さんから感嘆の声が上がった。

最初の訪問地は、あの有名な「八ッ場ダム」、群馬県長野原町。吾妻川沿いに設営されている

「やんば館」を見学。そこは八ッ場ダムの広報センターで多くの資料が展示してあり、ダム建設の目的と経緯を訴えかけていた。何十年にわたり政治に翻弄されている地元住民の苦悩をマスコミが伝えたせいも、前原国土交通大臣(当時)がダム中止を発言して以降、この地を一目見ようと訪れる観光客が急増し、一日に二〇〇人も来たことがあるとのこと。世間の喧騒をよそに何事もないかのように吾妻川の渓谷と紅葉した木々は、秋の日に映えて静かにたたずんでいた。昼食後、小春日和のなかに吾妻渓谷を散策。自然の山懐に抱かれる気分は格別でした。

午後四時に目的の猿ヶ京温泉に到着。豊かな自然に囲まれたホテルで源泉掛け流しの温泉にゆつくりつかり、今日の疲れを癒し心身共にリフレッシュし、六時からの宴会に臨んだ。

宴会はにぎやかに楽しく始まった。お料理はお宿自慢の豆腐懐石がメイン。大女将がお豆腐

にこだわりがあると言うだけあって大変美味であった。時間のたつのも忘れ、おおいに親睦を深めた。何しろ追加のお酒が三十本以上、いかに盛り上がったかわかるとういうもの。宴会終了後は、別室で大女将がこの土地に伝わる民話を話してくれるサービスもあり、しばし昔の懐かしい気分になり、最後はいつものごとくカラオケを全員で楽しみ、この日は終わった。



▲写真は吾妻渓谷

■山里の伝統工芸を見学

翌日も晴天。宿のみんなに送られ、谷川岳を眺めながら出発。午前中は旧三国街道、須川宿にある「たくみの里」を訪れた。

山里の伝統工芸を今に伝える工房(木工・和紙・わら細工・藍染め等々)が二四軒、観光農園が二五カ所点在する一帯は落ち着いた雰囲気の村であった。

案内人の方は地元のボランティア。元教師で八十歳をこえていらしたが、かくしゃくとして熱心に説明されている姿に心打たれるものがあった。町民総出で町作りに取り組んでいるとの言葉通り、随所にその心意気を感じた須川宿。昨日訪れた廃校利用の「伊参スタジオ公園」といい「たくみの里」といい地域興しに熱心な土地である。また直売所で売っているりんごのおいしかったこと。大量に買い込んだのはいうまでもない。

最後に訪れたのは、渋川市の「聖酒造」。二度目の見学であったためか説明もそこそこに売店へ。試飲し各自お気に入りのお酒を買い込んでいた。買い込んだお酒でまた「乾杯！」。後部座席は最後まで宴会状況。車内でのカラオケを楽しみながら、伊香保ICから予定通り順調に帰路についた。

■白門出身作家シリーズ

門田隆將 文学拾い読み

『この命、義に捧ぐ』

出版社／株式会社集英社  
著者／門田隆將

著者プロフィール

83年本学法学部卒業。新潮社に入社し編集部で活躍した後、08年4月独立。

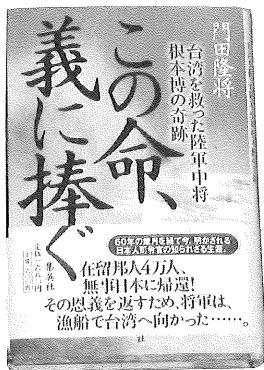
新潮社在職中に『甲子園への遺言―伝説の打撃コーチ高島道宏の生涯』を刊行し、一躍話題となった。政治、経済、司法、歴史、事件、スポーツ等幅広い分野を手がけるノンフィクション作家。本書で「山本七平賞」が決定した。

二年前だったか、『甲子園への遺言』を読んだ時、ノンフィクションという作品柄、割引しても文学の香りが淡いというか、

著者固有の作風を感じる事ができなかった。

出版社に在籍する身分で、自由に筆がふるえなかった面は否めないが、独立後に幅広い分野で作品を発表し、門田文学を確立したのは立派である。

本書を書店で手にした時、その書名に度肝をぬかれた。今どき、『この命、義に捧ぐ』とは、いかにも陳腐であり、右傾の臭いさえ感じさせるものだった。しかし、読み終えてみると、副題の「台湾を救った陸軍中将・根本博の奇跡」の内容が明かされてくる。



第二次大戦の終戦時、駐蒙軍司令官だった根本中将は、本国からの「武装解除命令」を拒否

し、越境して攻め込んで来るソ連軍と激突しながら時間を稼ぎ、内蒙古の在留邦人四万人の命と支那派遣軍の三十五万将兵を内地に帰国させるために国府軍・蒋介石総統の取りなしを得て実現させ、自分は最後の船で終戦翌年の21年8月に帰国した。

帰国、引揚げに当たっての大きな恩がある蔣総統には、二年前のカイロ会談で米ルーズベルト大統領と英チャーチル首相との三者会談の席で、日本の天皇制存続を強く主張されたという史実があり、重ね重ねの恩を受けていた。

第二次大戦が終つても中華民国には内戦が残り、ソ連軍が支援する共産軍が勢いをつけ、国府軍を各地で破り、蔣総統引退後のリーダー不在の国府軍は、敗走に次ぐ敗走を繰り返し、遂に大陸を追われ、最後の砦となる金門島まで退却を強いられた。金門島は、台湾を本城とした時の小規模ながらも重要な出城でもあった。第二次大戦が終る

まで日本の領土であったところだ。金門島の戦いには、本城・台湾を死守出来るかどうかの運命がかかっていた。

この絶対絶命の危機に陥った時、米占領下にあつてじつと静観していた根本元中将は、「義には、義をもって返す」と請われてわずか26トンの漁船に関係者十名と乗り込んで密航し、渡台した。

そして、中国人名を名乗って影の軍事顧問として大胆な作戦を進行するなどして、誰もが予想しなかった金門島の戦いに奇跡の勝利をもたらした。

六十年前、「命を守り、義を守った」武人の遺した偉業に光をあて、歴史に閉ざされた秘話を現代の我々に明かし、その価値を問う著者に敬意を表したい。そして、感動にふるえているだけではない。

「義」の本質が、利害を捨てて条理に従い、人道・公共のために尽くすこととして、肝に銘じたい。(平山惟美記)



### ■地名の由来

泉町という町名は、昭和三六年に志村大字前野の一部と、志村大字小豆沢の飛び地が合わさって出きました。この事は閉鎖された旧登記簿に記載されております。

泉町の町名の由来は、この地に清泉があったことによります。この清泉は「出井の泉」と呼ばれておりました。昔、薬師の泉、見次の泉と共に志村三泉と呼ばれていた泉で出井

### 地名の由来…⑦ 「泉町」の巻

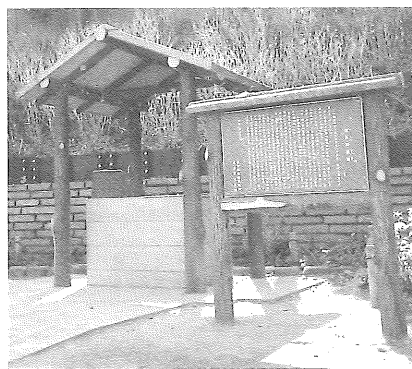
川の源泉でありました。湧水量が豊富で古代より人々が定住しておりましたが、現在では涸れて「出井の泉公園」となっております。

出井川も暗渠（あんきよ）となり、上を高架で首都高速五号線が通っています。また、この地は江戸時代に流行していた富士山や大山詣講中の禊（みそぎ）の場でもあり、道中の旅人の水飲場でもありました。文

化文政時代の紀行記「遊歴雑記の四拾八上板橋清水村酒泉溪」に書かれて

いるものを、少し読みにくいかも知れませんが引用してみます。

「一、武州豊島郡板橋の駅は、御領にして下宿上宿とわかれて一駅なり、駅中に板橋あり、長さ九間これを上下の境とす、此駅の西の方を前野村といへり、此村の内に清水村といふ



▲出井の泉跡

あり、是小名のよし、一村の広さを察すべし、されば件（くだん）の駅を出はなれ凡一町ばかりにして、街道より左へ入る事凡四五町に、清潔の冷泉湧出す・・・」

### ■泉のお酒と煎茶のお水

このあと泉にまつわる話がつづられています。それは、

「昔、この村に老いた父を持つ農夫がいた。老いた父は酒が好きだっ

たが貧乏なので酔っ払う程飲むことはできなかった。ある日、その父が沈酔して帰ってきた。農夫はどうしたのか聞いた。すると酒が涌き出している所があるという。一緒に行っ

てみると付近は確かに酒臭い。しかし農夫が飲むと水である。老親が飲むと美酒になる。これは天が与えてくれたものなのか。老父は一生飽きる程に酒を飲んで、死んだそうだ。」

更にこの水は、煎茶にもよいという話が続きます。

宮田市右衛門（たぶん当時著名な茶人）という人が弟子を伴い百姓の利右衛門宅にて茶を煎じて飲み、この水を土瓶に入れて持ち帰り楽しんでたといいます。ある時は途中で、たたみ焔炉（こんろ）を組み立てて煎茶し飲んだそうです。また別の時には、種問屋で有名な清水権右衛門の家に寄り、麦飯のご馳走の後にこの酒泉の地を散歩したといえます。この種問屋は練馬大根、にんじんの種など根菜の種で全国的に有名な問屋で大阪からも注文があったそうです。

その後、板橋権右衛門となって子孫の方が今も近所に住んでいるそうです。

今回は、資料等板橋区役所の吉田様に変お世話になりました。

（文・写真とも 中三川孝幸記）



編集後記

●多くの会員に愛された前編集長の金子益朗さんが亡くなられて早くも一年が経過。その後、当編集部では急ぎよ平山惟美元編集長に再登板をお願いし、昨年、無事二冊を発行。今年も「春季号」の編集会議を一月下旬に開いて作業を開始。

●ところが二月に入つて、突如編集長が急性肺炎で入院。「困った」と、編集部では頭を抱えたが、幸いにして編集長は十日で無事退院し編集員を叱咤激励。何事もなかったかのように刊行に漕ぎつけることができた。

（伊藤記）